

ゆ

ゆ

ゆ

悠々として  
遊びごころと  
優しさにあふれる  
人ひとの  
かがやき

Vol. 3

鳥取県湯梨浜町

ゆうゆう、  
ゆうり  
ま

---

悠々として  
遊びごころと  
優しさにあふれる  
人びとの  
かがやき

いゆ  
う  
いゆう、  
はり  
ま

鳥取県湯梨浜町



# ゆうゆう、ゆりはま

鳥取県のまんなか

日本海に面した湯梨浜町は  
趣ある湖のほとりに全国でもめずらしい  
湖中温泉(湯梨浜の「湯」)が湧き、  
里には二十世紀梨をはじめとする  
おいしい果実(湯梨浜の「梨」)が実り、

日本海に面して  
美しい白浜(湯梨浜の「浜」)がつづけます。  
陽がさんさんと降りそそぐこの風土のなか、  
活躍をつづける人びとを取材し、まとめたのが  
この「ゆうゆう、ゆりはま」誌です。

日本海に面して

美しい白浜(湯梨浜の「浜」)がつづけます。  
陽がさんさんと降りそそぐこの風土のなか、  
活躍をつづける人びとを取材し、まとめたのが  
この「ゆうゆう、ゆりはま」誌です。

第1巻(2018年刊)、第2巻(2019年刊)は  
とくに女性たちの輝きにスポットを当てましたが、  
この第3巻では、

「忘れてはいませんか」と男性陣も  
たくさん登場していただきました。

ゆうゆうとは、

おおらかな「悠々」。

あそび「」やの「遊々」。

やせし「懶々」。

さあさまな場面で、さあさまなひらめきのもと、  
たくさんの「実り」を生む

熱い「ゆうゆう」たちの報告です。

4 ゆうゆう、ゆりはま

## 一章 すこやか

10 次の夢は、グラウンド・ゴルフの国際組織を作ること。

12 すこやかな心身を養う体操の、はつらつとした指導者だ。

14 ウォーキング・リゾートとして、東郷湖の魅力を世界に発信してゆく。

16 誰かがやらないといけないなら、やれることは断らない。

18 サーフィンと出会って、人生が変わった。その歓びを伝えてゆく。

## 二章 ふくよか

22 ピートルズとメキシコ料理。決断力と謙虚さ。

24 1品1品、ていねいに。美味しい時間を過ごしていくだけ。

## 三章 たおやか

26 人生第2章をこの地と決め、コミュニティづくりに奮闘する。

28 フルーツ王国の素材を生かし、安心してわが子に食べさせられるケーキを。

30 美味しいメニューの仕上げは、ここからの眺めです。

34 早寝早起き・晴耕雨読。私らしい暮らしに還れました。

36 朝露に包まれるバラ園は、光と色彩のドラマだ。

38 木は何にでもなる。何を作ろうか考えるのが楽しくてたまらない。

40 元鑑識課写真係は日本海の芸術写真を撮り続ける。

42 趣味は、「問題解決」。東郷湖への愛が止まらない。

49 人びとの、豊かな時間を

一章

# ふくよか

しあわせなひとが  
作る味は  
ひとをしあわせにする



ビートルズとメキシコ料理。  
決断力と謙虚さ。

タイニー・キッチン  
スムース代表  
米田桂吾



いろいろな意味を含んで「手づくりの店」である。始めるにあたり「音楽と料理の共演」といった空間のあり方について、じっくり考えた。現実的な準備にも時間をかけた。内装工事もコツコツと自分で進めた。そういう意味での、手づくりである。

ビートルズに惹かれたのは米田桂吾さんが小学生のときだった。早熟と言つていいだろうが、それは一過性の関心ではなく、深く身に沁みこんでゆく。高校は吹奏楽部で活動するが、心の水脈にビートルズが流れていたから、どこか居心地が悪かったにちがいない。音楽専門学校に進み、アメリカ（ロサンゼルス）に短期留学したことが大きな転機となる。音楽の深さに触れただけでなく、その日々のなか

で、ポール・マッカートニーが行きつけというメキシコレストランなども知り、メキシコ料理の魅力に開眼し、研究を決意する。

帰国して、わが道を探ることになるが、挫折を繰り返した。そうしたなか、ある人のアドバイスもあって、音楽空間の飲食店を構想しはじめたのが20代なかごろ。そして2017年、メキシコ料理のライブハウスのオープンに漕ぎつけた。

「長年苦労を重ねてやっと飲食店を開く人が多いなか、音楽しかやってこなかつたズブの素人がぼつと始めるのは失礼きわまりないこと……」という想いはつねにある。その謙虚さがあるからこそ、この世の中にふたつとない個性的な店が育つてゆくのだろう。

1品1品、ていねいに。  
美味しい時間を  
過ごしていただく。

翠泉  
料理番頭 牧田和己  
若女将 牧田貴子



牧田和己さんは、料理自慢の温泉宿の3代目。高校卒業の頃、迷わず進学を決めた調理師学校で、同期だった貴子さんと知り合った。

「親からは、大阪から連れてくるなら、旅館業を理解してくれる女性を」と言っていたのですが、結果、板前の助手もできる人で良かったなあ」と、会心の笑み。

一方、「初対面の印象は、『大きな人だなあと』夫を見上げる貴子さんは、兵庫県出身。小学生の頃から作るのも食べるのも大好きだったので、食の仕事に就こうと料理の道を目指していた。

この和風建築の宿で、お客様に喜んでいただくには? リピートしていただくには? と、2代目であるこの両親と若夫婦で知恵を合わせ、

「この頃よく、夫婦で顔が似てきたと言われます」宿の自慢のひとつでもある桜の下で、よく似た笑顔が満開である。

人生第2章をこの地と決め、  
コミュニケーションづくりに奮闘する。

みんなの食堂 ゆるりん  
村上克己



子どもたちとその家族の支援に焦点をあてた社会活動「子ども食堂」が全国に広がっている。湯梨浜町で個性あふれる役割を果たしている「みんなの食堂」も支援の社会活動という意味では通じるものがあるが、性格が少し異なる。「みんな」と銘打つように、対象はさらに広い。年齢も性別も職業も、障がいのある人もない人も、なんの制約もなくどうぞおいでください、という主旨なのだ。

「すべてが家族、その家族のコミュニティ空間といったところでしょうか。みんなの居場所ですね」リーダーの村上克己さんが言うように、あたたかく、風通しのよい空氣に満たされている。

村上さんの生まれば京都だ。大手電機メーカー

でぱりぱり仕事をした。工場の建設にも携わり、営業の最前線にも立ってきた。そうしたなか、定年を迎える直前に倉吉市に赴任した。「第2の人生はこの風土がいいな」と夫婦で話合った。そして土地を探し、「こそど決めたのが湯梨浜町だった。「当地の人たちは基本的に温厚で、いい意味でのチームワークがあると感じました」。その直感は当たっていたともも確信する。縁あって、「まちづくり」の会社の切り盛りを委ねられ、電機メーカーでの現役時代に培った実践力を投入することになった。その一環が「みんなの食堂」である。集まる人びとは、地域にかぎらず県外からも評判を聞いてやってくる。リーダーの座右の銘は「みなみ我が師なり」。誠実で、人望があつい。

フルーツ王国の素材を生かし、  
安心してわが子に  
食べさせられるケーキを。

菓子工房シェル・ブール  
朝倉真一  
朝倉幸子



小学生のころお菓子が好きな子だったという  
のは珍しくない。子どもなもの、あたりまえ。  
ところが、その度合いが並外れていたのが朝  
倉真一さんだ。「極端な偏食少年でした」。肉も  
魚も食べられない。朝倉家の食卓のカレーは  
肉入りと肉抜きの2種類が用意されなければ  
ならない。手のかかる長男だが、そのかわり母  
の手づくりのドーナツやかりん糖は、身も心  
もとろける思いでつまみ食いした。登下校の  
途中に洋菓子工場があった。しおつちゅう窓  
にへばりついて中のようすを凝視していた。

そんな少年の人生はすでに決まっていたよう  
なものだつた。高校を出てすぐ、大阪のホテル  
に勤務したのは、いずれケーキ職人になりた  
いとの考え方からだ。だが、もちろんすんなり  
「ケーキは安心してわが子に食べさせられる  
ものでなければならない」。

はいかない。ホテルを去り、洋菓子店で修業  
し……糸余曲折の末、一念を貫いて、故郷の  
湯梨浜でケーキ店を出すべく帰ってきたのは  
33歳のとき。だが、それも簡単にはいかない。  
途方にくれる。大阪のホテルの仕事で知り  
合い、結ばれた妻の激励にからうじて支えら  
れる。

「オープンして初めて売れたケーキは忘れま  
せん」。チョコとバナナの一品。そして、無我夢  
中で職人の道を突き進む。「湯梨浜はフルーツ  
王国。いい鶏卵もあり、ケーキにとって絶品の  
素材に恵まれています」。これを軸にした自信  
作を次々と生んでゆくなでの信念は、  
「ケーキは安心してわが子に食べさせられる  
ものでなければならない」。

美味しいメニューの仕上げは、  
ここからの眺めです。



パティシェ  
全日本ノルディック  
ウォーク連盟公認指導員  
藤平実喜

ウォーキング・カフェの立ち上げメンバーの面接で、「スポーツは好きですか?」「はい、大好きです!」と答えて合格。繊細なケーキや焼き菓子を創作する藤平実喜さんは、小学校から高校までバレーボールに打ち込んだスポーツウーマンだ。子どもの頃からお菓子作りが大好き。高校卒業後は大阪の製菓学校で学び、神戸でパティシエとしての腕を磨いた。

カフェでは、桜いちご大福、梨ジュースなど、地元のフルーツを使った旬のオリジナルスイーツが評判だ。

「お菓子で湯梨浜の四季を味わってもらいたい」と考案するケーキを目当てに、男性のおひとりさまもやって来る。

世代を超えて楽しそうに語らう健やかな笑顔に触発されて、公認指導員の資格も取った。

「夕暮れ時、デッキからの風景は涙が出るほど美しい。それをもつともっとたくさんの人に知つてもらいたい。人の輪を広げるippoになれたら」

湯梨浜の旬をやさしいケーキに仕上げて、スイートな会話が弾む場所を守っていく。

31